

# ピアノ教育と生涯学習

## — 保育者養成校における成人教育について —

### Piano Education and Life-long Learning

#### — A Case of Adult Education at Some Nurse Training Schools —

千 葉 圭 説                      鈴 木    し お り \*  
Keisetsu                      CHIBA                      Shiori                      SUZUKI

## 1. は じ め に

我が国では、1994年11月に、音楽の憲法ともいえる「音楽教育振興法」が制定され、その中では、「生涯学習」の視点から「生涯にわたり音楽を愛好するための音楽教育」がうたわれている。音楽は早期教育が最も有効で、したがって、乳児・幼児の時代の音楽体験が、その人の一生を左右するといっても過言ではない。その意味から、保育所・幼稚園での音楽教育が、家庭教育とならんで重要であることが改めて注目されている。保育者養成校におけるピアノ教育の指導理念・指導方針も、今後は、生涯学習の視点からダイナミックに捉えるべきであろう。

また、幼稚園教育要領及び保育所保育指針の新領域「表現」では、従来の「音楽リズム」における技術指向的偏向が克服され、「感性を育て、表現する意欲を養い、創造性を豊かにする観点」が示された。これらの新要領等のもとで、乳児・幼児の「表現への興味」を養うために、「感性・意欲・創造性」の「育て方」について、多くの論議が成されている。その中で、音楽の重要性はますます認識されつつあるが、保育者養成校におけるピアノ指導内容においては、その指導理念・指導方針や使用する教材等に関して、現在、模索状態にあると言えよう。

本稿は、生涯学習におけるピアノ教育の根底を成す問題点の1つとして、保育者養成校における成人教育をとりあげ、その指導法を考察する。

## 2. 保育者養成校のピアノ教育研究

保育者養成校において、ピアノは音楽の基礎を学ぶには有効な楽器とされているが、特有の技術的な問題が多く、成人のピアノ学習未経験者が限られた期間の中で、いかに効率よく習得するかが常に論議の中心となってきた。周囲では、「『歌遊び』や『わらべうた』のみが、乳児・幼児の音楽活動で有効である」とする意見も聞かれ、また、近年は、カリキュラム改革の波も起こり始めている中、保育を援助する楽器として、ギターやアコーディオン等の、ピアノ以外の楽器も注目され始めてきた。現在、保育現場における「ピアノの必要性」までにも及ぶ、さま

\* 北海道女子大学短期大学部非常勤講師

ざまな論議が交わされているのである。

保育現場で行われるピアノによる援助は、次の5点に大別することができよう。

- ① 歌唱伴奏
- ② 即興表現
- ③ 創作
- ④ リトミック
- ⑤ 行動と行動とのつなぎ目

①は伴奏法、②と③は創造性とコミュニケーション、④と⑤はリズムにそれぞれの基盤をおき、養成校での指導内容も、おおむね以上の点に沿って行われている。その内容の中には、「音」にかかわる「タッチ（打鍵）」の問題、「視奏（初見演奏）」にかかわる「読譜」の問題、「フレーズ」にかかわる「強弱」や「アーティキュレーション」の問題、あるいは演奏形態としての「アンサンブル」や「連弾・2台ピアノ」、及び指導形態の問題が含まれる。ピアノを習得することは、成人の学習未経験者にとって、さまざまな難しい課題に直面することになるが、それだけに「総合的な楽器」として、多くの可能性を含んでいると言えよう。

本稿では、保育者養成校におけるピアノ教育の分析のために、日本保育学会大会の第40～50回（1987～1997年）までの研究論文集における「ピアノ指導」に関する論文をとりあげ、体系立ててまとめることで、「保育者養成校におけるピアノ教育の意義」「保育を援助するピアノ活動」とは何かを明らかにし、確認・整理・要約することで、「保育現場におけるピアノ教育の問題点」を考察する。この10年間の間に、幼稚園教育要領及び保育所保育指針の改訂で新領域「表現」が位置づけられ、また、「音楽教育振興法」が制定されたことで、子供たちの音楽教育の指針が明確に示された。それに伴い各地で新しい試みが活発に成されているからである。そこから「養成校におけるピアノ指導」の今後のあり方も具体的に見出せるものとする。

大会研究論文のピアノ教育に関する内容は、以下の5項目に大別することができるが、本稿では、その中から主な論文を要約し、筆者らの考察を「評釈」として後述した。

- ① 総合的な表現力・指導法・問題点
- ② 即興表現
- ③ 伴奏づけ・コードネーム・旋律表現
- ④ 教材（バイエルピアノ教則本及び歌唱教材等）
- ⑤ 意識調査（保育者及び養成校学生における調査）

なお、紙面の関係上、論文題目と著者名は省略の形を取り、例えば、〔第47回日本保育学会大会研究論文集089 窪田千恵子『総合的表現力を養うためのピアノ教育の一例——学生の意識変化とその効果——』〕を、〔47—089 窪田〕と記することにした。

### 3. 第40～50回日本保育学会大会研究論文集（1987～1997年）における ピアノ指導に関する論文の要約と評釈 — 総合的な表現力・指導法

第40～50回までの日本保育学会大会研究論文集におけるピアノ指導に関する論文の中で、総合的な表現力・指導法に関する論文は最も多く、逆に即興演奏に関しては最も少ない。しかし、即興演奏・伴奏づけ・教材等の個々の研究は、広い意味で、表現力・指導法の研究に含まれると言えよう。今回は、数多い論文の中で、一貫した指導理念・指導方針によって具体的な指導案を提示し、総合的な表現力を目指している論文をとりあげる。

#### (1) 総合的な表現力 —〔47—089 窪田<sup>(1)</sup>〕

養成校におけるピアノ指導は、細分化された技術習得に、精神的にも時間的にもエネルギーが傾けられ、「保育の内容」に関する総合的視野に立つピアノ教育の本質が、忘れられがちであるといえよう。

保育現場での子供たちは、その発達段階から、リズム遊びや簡単な歌を歌い、簡易な楽器を使って表現活動を行っているが、その中でピアノは、唯一総合的に保育者が、保育生活の一部として、また、歌の伴奏やほかの楽器のバックアップとしてさまざまな方法で使用されている。すなわち、ピアノの学習は保育生活や他の専門科目『図工・体育・国語』等との関連性を意識下におき、指導展開されてこそ生かされる。

研究課題として、A教材選択、Bグループ・レッスン、Cカリキュラム、D表現方法の4点が挙げられている。特徴として、教材は基礎編の段階からイメージを引き出すために表題曲をとりあげ(A)、グループ・レッスンをレベルごとのグレード別に組み、互いの演奏を鑑賞し合うことで「鑑賞教育」として捉え(B)、進度曲数のノルマは排除し、授業にゆとりをつくることで、「感性を育てること」と、教師と学生の「一対一のプレッシャー」を取り除くことを目的としている(C)。また、表現方法として、教材曲のイメージから「紙芝居」「物語」「手作り人形」等へと創造展開していることである(D)。

『即応性を求める現代の学生気質』を踏まえて、養成校におけるピアノ指導は、個々から総合的なものを造り上げる喜びや達成感・成功感をもたせ、また、指導者側も、学生が単に幼児教育志望という限定意識を持たずに、人間本来のものとして、大きく捉え援助していきたい」としている。

#### 〔評 釈〕

保育者養成校では、音楽大学出身の教師と学生とのマンツーマンのレッスンが主流であるため、ピアノは、いわゆるクラシック音楽における「独奏楽器」として捉えられがちである。しかし、養成校においては、音楽大学のカリキュラムや評価法をそのまま使用するわけにはいかない。すなわち、さまざまな問題の中核の部分に、保育者養成校におけるピアノ指導内容に対する「理念の欠如」があり、早急に「指導理念の確立」をはかる必要があると思われる。その意味から、〔47—089 窪田〕では、研究課題A、B、C、Dにおいて、指導理念に関する具体

的な示唆が、数多く与えられていると考える。

(2) 総合的な指導法 —〔47—311, 48—319, 49—369, 50—214 横井川<sup>(2)</sup>〕〔48—322 笠井<sup>(3)</sup>〕

〔48—322 笠井〕では、養成校におけるピアノ指導が保育現場でより有効であるために、どのようなピアノ教材をどう用いるべきかを、共同研究者とともに、総合的に考察している。そのためには、保育現場をよく把握し、学生たちに「どんな目的で、何を1番習得させたいか」という意図を明確にすべきであり、それには、次の3点を課題とした授業が有効であるとしている。

- ① 全調課題 — コードネーム・調性・音階・カデンツを習得し、コードに即座に対応できることを目的とする
- ② 学生の進度に応じ楽譜に忠実に弾く課題 — 演奏能力の向上とともに、さまざまな曲の様式の異なる時代、さまざまな作曲家の作品を経験させることを目的とする
- ③ 現場で求められる要素を含む課題 — 伴奏づけや弾き歌い等の、実践に結びついた技術の習得を目的とする

コード付けに関しては、実習としてポピュラー音楽を取り入れたり、形態も学生と教師の2台ピアノで演奏するなど、多様な視点からの工夫がみられる。

また、一連の〔47—311, 48—319, 49—369, 50—214 横井川〕では、学生の中でもピアノ学習未経験者に焦点を絞り、①バイエルピアノ教則本、②ピアノ曲(クラシック小品)、③子供の歌、④リズム曲を1年生前期から並行して指導することを重視している〔47—311〕。同時に、才能教育のスズキ・メソッドの「復習」を導入した学習方法で、“すぐ弾ける曲(レパートリー)”の拡大に努めている点が特徴的である。保育実践で役立つには、子供たちの前ですぐに弾ける技能が必要とされるからである〔48—319〕。

〔49—369〕では、①バイエルピアノ教則本で指導していた基礎奏法・理論を、「基礎テクニック」としてまとめた単純な課題に切り替えて指導している。一連のテクニックの課題は、レガート・スタッカート・付点のリズム・重音・和音(カデンツ)等の伴奏型、及び音階を網羅しており、初歩の子供の歌の伴奏やリズム曲は、おおむね習得できる。

すなわち、「基礎テクニック」を半年間、毎授業内容に組み入れて反復を習慣づけ、並行して、「ちょうちょう」「かっこう」等の子供の歌を、最初はレガート奏法に留意したユニゾンで、次に、左手のアルペルティバスや分散和音の上で演奏していくという学習方法である。

〔50—214〕では、ピアノ未経験者5人の1年間の練習時間と上達の相関に着目し、調査の結果として、「極端な増減のない平均的な練習時間を保ちつづけること」「①～④の練習内容にかたよりがなく、復習を基本とすること」が、上達の秘訣であるとしている。

〔評 釈〕

ほかの多くの論文において、保育者養成校における“ピアノの小品”教材として望まれることは、短い曲であること、単一のテクニックであること、音楽的(芸術的)であること等が挙げられている。それらはいずれも重要であるが、更に、古今のピアノ曲から学ぶべきことは、

そのさまざまな音楽様式であろう。

学生が、固有な旋法やリズム、ハーモニー、フレーズ、そして形式や構成等に数多く接することで、「音楽語法」が豊かになることに指導の力点がおかれるべきで、それを学生が、自らの“音創り”や“創作活動”に使うことが望ましい。

「音楽語法」とは、国語教育における“ことば”による語法と同様に、音楽教育における“音”による語法をさす。すなわち、国語科では“ことばでの自己表現”を目的とするが、音楽科では“音での自己表現”を豊かにすることを目的としているのである。

ピアノ小品の教材は、その意味において、クラシック音楽の時代別の分類のほかに、無数の分類方法が可能であろう。例えば、音楽語法の具体的な“使い方”を習得するための、「世界のお国めぐり」「季節と行事」「動物」などの分類、あるいは、“分類のための分類”と見なすことのできる「旋律と旋法」「効果音」「リズム」「形式」などである。

重要なことは、さまざまな視点から分類・比較したピアノ小品を、できるだけ数多く学生に提示することで、将来の創造活動において役に立つ「音楽語法」を、数多く蓄積させていくことである。

“ピアノの小品”を教材として、演奏能力を高めることは、付加的な効果としては期待しても、音楽大学のように、パフォーマンス（Performance, 演奏）のための演奏能力育成を、最終目的としないことが保育者養成校においては重要である。

基礎テクニックの習得は、養成校における短い期間で正確に身につけることは、特に、成人の未経験者にとっては至難のわざであろう。この点でも、音楽大学のような観点から、指導・評価すべきではない。重視すべき点は、“イントネーション（Intonation, 抑揚）”と“読譜（Sight-reading, 視見能力）”であると考えられる。

イントネーションは、個々のリズムからフレージングにかかわる問題で、“リズムに乗る身体”“歌う心”が基盤となる。また、初見のための読譜能力は、数多くの曲に接することでのみ養われる。指先の技術よりも“聴く耳”“歌う心”“読む力”に重点をおき、指導すべきであろう。

ここで、筆者らが〔49—369 横井川〕から考察した指導法の一例を述べてみたい。バイエルピアノ教則本の後半の20数曲を除いた小曲は、音楽の基礎知識・基礎テクニックを養うためには優れている曲であるが、音楽的であるとは言いがたい。そこで右手と左手のパートを別々の課題とし、ユニゾンの初見課題とみなす。したがって“課題を数多くこなすこと”や“左手を右手同様に使用すること”で、“楽譜を読む力”や“左手の熟練”を目指す。その後、グループ・レッスンで、学生の各自が、左手のパートになったり、右手のパートになったりする“連弾”などのアンサンブルをする。“合わせること（アンサンブル）”で、音楽の総合的な力は飛躍的に伸び、音楽をより楽しむことができるようになる。これらの“音楽体験”によって、学生の“音楽する心（歌う心）”を少しでも養い、同時に、互いの音を“聴く耳”も養おうというねらいである。“聴く耳”が養われれば、右手と左手のパートの連弾曲を、もとの両手の独奏曲に置き換えることは、さしたる苦勞ではないであろう。

バイエルの後半 20 数曲に関しては、音楽的にも、特にとりあげるべきものがないため省略しても良いし、むしろ、時間の節約のために“省略すべき”と考えるが、我が国の保育園・幼稚園の就職試験や教員採用試験に、この部分が出題されるのは、なんとも理解しがたいことで再考を望んでやまない。

以上、本稿では、第 40～50 回日本保育学会大会研究論文集 (1987～1997 年) におけるピアノ指導に関する表現力・指導法について要約・考察したが、その問題点と今後の展望についての確認作業は次の機会を期したい。

## 参 考 文 献

- 1) 窪田千恵子「総合的表現力を養うためのピアノ教育の一例——学生の意識変化とその効果——」(第 47 回日本保育学会大会研究論文集 089 178～179 頁, 1994 年).
- 2) 横井川好子「保育科学生の初歩段階のピアノ学習過程についての研究」(第 47 回日本保育学会大会研究論文集 311 624～625 頁, 1994 年). 「ピアノ学習未経験者に復習を導入したピアノ指導法——ピアノ学習未経験者と経験者の比較を通して——」(第 48 回日本保育学会大会研究論文集 319 642～643 頁, 1995 年). 「基礎テクニックの網羅的課題によるピアノ習得法——ピアノ学習未経験者の場合——」(第 49 回日本保育学会大会研究論文集 369 746～747 頁, 1996 年). 「ピアノ学習未経験者の練習時間の分析」(第 50 回日本保育学会大会研究論文集 214 558～559 頁, 1997 年).
- 3) 笠井かほる「保育者養成におけるピアノ指導に関する研究Ⅲ——指導の基本理念と事例の検討——」(第 48 回日本保育学会大会研究論文集 322 648～649 頁, 1995 年).